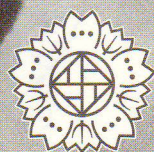


日本女子大学創立者 成瀬仁蔵 生誕一五〇年記念

写真で見る

成瀬仁蔵 その生涯



学校法人 日本女子大学
JAPAN WOMEN'S UNIVERSITY

1908年頃の成瀬仁蔵

はじめに

日本女子大学の創立者 成瀬仁蔵なるせじんぞうは、一八五八（安政五）年に現在の山口市吉敷に誕生しました。幕末維新の風が吹き荒れる長州藩に下級武士の子として生を受けた成瀬は、新しい日本を作りたいという大志を抱き、単身、荒海へと漕ぎ出しました。

生涯、その志を貫き通した成瀬には、主に三つの顔があります。第一が「宗教家」としての顔です。故郷を出て大阪の浪花教会で受洗後、牧師となり、奈良や新潟などで熱心な伝道活動を行ないます。

第二の顔が「教育者」としてのものです。大阪では梅花女学校の主任教師を務め、新潟に赴任後は新潟女学校を設立するなど女子の中等教育に従事します。そして一九〇一（明治三四）年、日本で最初の組織的な女子の高等教育機関である日本女子大学校を創設しました。

さらに第三の顔として「社会活動家」があげられます。思想団体である婦一協会を設立するなど、世界の平和を探求する活動を展開しました。

成瀬はしばしば、自らの生涯の目的は「天職」を全うすることだと日記に記しています。「天職」——それは理想的な社会を創ることでした。彼が見せた様々な顔は、すべてこの自分に与えられた使命に繋がっていたといえます。

「天職」に生きた一人のサムライの、波瀾に富んだ生涯をここに紹介いたします。

維新動乱の舞台 長州に誕生

成瀬仁蔵は一八五八（安政五）年、現在の山口市吉敷に誕生しました。父は吉敷毛利家の祐筆をつとめる下級武士で、村内の教育にもあたっていました。母は近村の武家の出身で、成瀬には姉と弟がいました。



成瀬の故郷 吉敷村。

後方の山は泉山。成瀬は後に雅号を「泉山」と称した。

山間の自然豊かな村で育った成瀬は、近所の神社や川を飛び回る活発な少年となりました。五歳頃からは郷校憲章館に通い、学問や武道にも励みました。その後、家の



上／成瀬公園。成瀬の生家跡には本学の卒業生によって碑が建てられ、現在、山口市の史跡となっている。
左／成瀬が少年の頃に遊んだ吉敷川

私塾を手伝う一方、父の勧めで近隣の医師の助手となりますが、「人の身体をいじくることなどはつまらない。何か天下の事をしたい」と考えるようになります。
幕末維新の舞台となった長州は、その後の日本をリードする人物を幾人も輩出した土地柄でした。小さなサムライであった成瀬少年も「アンビシヤスであった」のです。

宗教心の芽生え

成瀬は少年時代に家族を次々と失いました。わずか七歳で母親と可愛がってくれた祖母を亡くします。母の死後、その妹である叔母が成瀬を溺愛しますが、かつて母



上／父 成瀬小右衛門
左／後年の姉 久子（左端）と叔母（中央）



や祖母から受けた愛情も含め、女性
性の愛情は、父の厳格な躰とは異なり、感情的で愚かなものと成瀬の目には映りました。後に、そうした考え方は間違っていたと語っていますが、女子の教育を志すきっかけとなっ

たといえます。

その後、さらに十六歳のときに弟と父も病で亡くし、他家に嫁いだ姉以外の肉親をすべて失ってしまいました。若くして身近な人々の死に直面したことは、成瀬の宗教心を芽生えさせ、その後の人生観に多大な影響を与えました。

父の死後は、設立されたばかりの山口県教員養成所に入學。卒業後は小学校教員や校長となり、県内で教鞭を執りました。



山口県教員養成所跡（山口市役所内）

キリスト教との出会い

一八七七（明治十）年の夏、十九歳となった成瀬に運命的な出来事が起こります。アメリカから帰国した郷里の先輩 澤山保羅さわやまほろうとの再会です。澤山は、初めて日本で牧師になった人物で、同志社の新島襄と共に、近代日本のキリスト教会の基礎を築いたことで知られています。帰国後、大阪に日本最初の自給教会である浪花教会を設立し、初代牧師となりました。



澤山保羅（1852—1887）

将来進むべき道に悩んでいた青年成瀬は、吉敷村に帰省した澤山を訪ね、自身の疑問や不安をぶつ

けます。澤山との一晚にわたる議論は、成瀬に深い感銘を与えました。後に成瀬は「一日話を聞いて、生まれ変わったような心持がしました」と振り返っています。成瀬はすぐに澤山の後を追って郷里を出、大阪の浪花教会で澤山から洗礼を受けました。



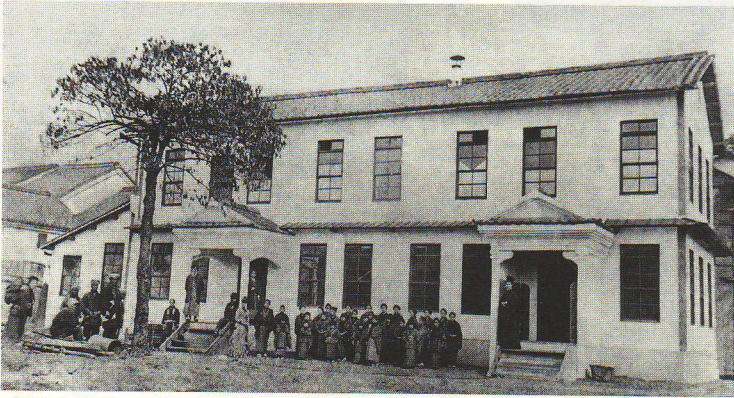
大阪 浪花教会の信徒と共に。後ろから2列、左から2人目が成瀬。

大阪 梅花女学校

大阪に出た成瀬は、女子教育への道を歩み始めます。一八七八（明治十一年）年、日本組合基督教会の信徒によつて梅花女学校（後の梅花女子大学）が開かれました。

成瀬は澤山保羅と共にその創立に参加し、ただ一人の専任教師となります。教務から雑務までを一手に引き受け、奮闘の毎日を送りました。

またその頃、二十歳になった成瀬は同じ教会の信徒であった服部マスエと結婚しています。二人は信仰を共にし、苦労をわか



梅花女学校

（写真提供：梅花学園資料室）



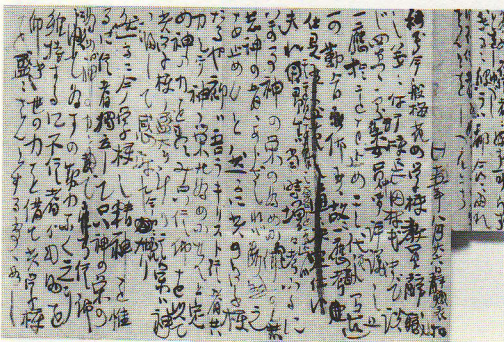
成瀬夫妻

ちあい、教育と伝道活動に専心しました。

一八八一（明治十四）年には、処女作『婦女子の職

務』を発刊します。神の前では人は平等であるというキリスト教の教えに基づき、女性の役割を説いたものでした。成瀬の女子教育への考え方の根本には、キリスト教の思想があることが分かります。

自給の姿勢を貫いていた梅花女学校の経営状態は常に苦しく、やがて外国や信徒以外からの援助を得ようとする意見が出始めます。成瀬はそれに反対し、また伝道への熱意もさらに高まったため、一八八二（明治十五年）年、辞職願を提出しました。



梅花女学校辞職願（草稿）

牧師時代 — 大和郡山 —

梅花女学校を辞職した成瀬は、一八八三（明治十六）年一月、奈良の大和郡山に開かれていた伝道所に派遣されます。年末には大和郡山教会が設立され、翌年、成瀬に対し牧師となる試験が外国人宣教師や澤山保羅、新島襄などによって行なわれ、新牧師 成瀬仁蔵が誕生しました。

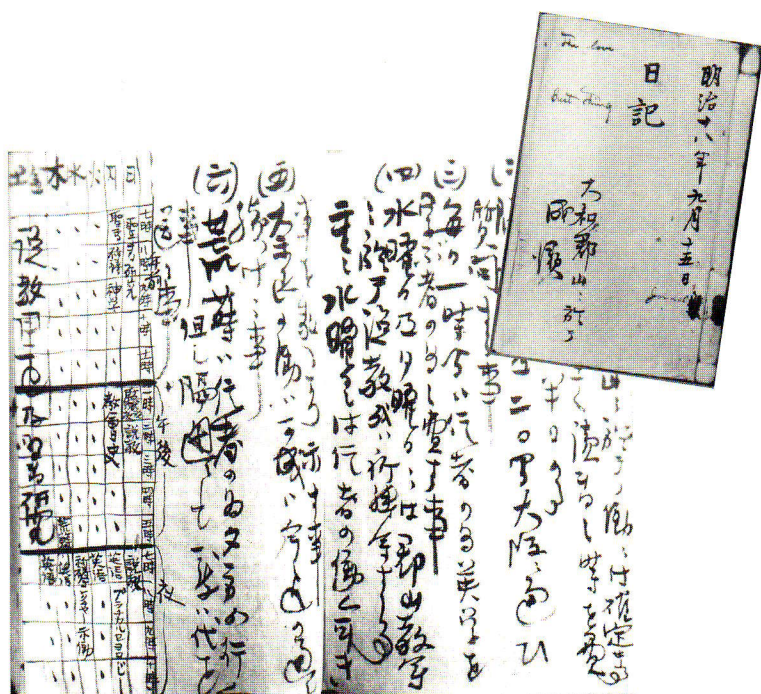
明治になりキリスト教の禁令は解かれたものの、伝道活動は相変わらず困難を極め、投石を受けたり、夜道で襲われたりすることも珍しくありませんでした。しかし、成瀬の奮闘により伝道の範囲は次第に広まり、教会員も増えていきました。



20代中頃の成瀬仁蔵

その頃、日本組合基督教会は新潟へ派遣する牧師を求めており、成瀬にその白羽の矢が立ちます。成瀬は一旦は

断るものの、重い病に侵されながらも信仰の道を突き進む澤山保羅の説得に心を動かされ、新潟へ赴く決心を固めます。成瀬が新潟へ出発する日、病床にあった澤山が駅まで見送りに現れ、成瀬を驚かせました。これが澤山との最後の面会となりました。



大和郡山時代の日記。

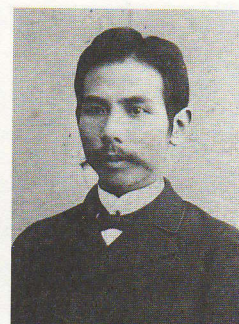
一週間のスケジュールや、伝道の方針が書き込まれている。

新潟女学校の開校

一八八六（明治十九）年、新潟教会が設立され、成瀬は初代牧師となりました。港町である新潟には、早くから新しい文化が入っていました。が仏教色が強い土地柄のため、伝道活動は思うように進んでいませんでした。しかし成瀬の精力的な活動により、信徒は増え、



新潟女学校の生徒と共に。最後列右から5人目が成瀬。



新潟時代の成瀬仁蔵



麻生正蔵（1864—1949）

伝道地域も広がっていきま
した。

また新潟でも女子教育活動に携わり、一八八七年、キリスト教主義の新潟女学校を開校し、校長に就任（翌年牧師を辞任）しました。さらに男子中学校である北越学館の創設にも関わっています。北越学館の教員の一人に

は、日本女子大学の第二代校長となる麻生正蔵がいました。二人はこの時より親交を深め、後にかげがえのないパートナーとして同じ道を歩むことになります。

多くの問題を抱えながらも奮闘する成瀬でしたが、やがて自身の新しい道を模索しはじめます。今後の活動の指針を求め、アメリカ留学を決意するのです。

外国人宣教師や教会関係の人々の暖かい支援を得て、一八九〇（明治二三）年の年末、单身、アメリカへ旅立ちました。

單身 アメリカへ

一八九一（明治二四）年一月、アメリカのボストン郊外に着いた成瀬を暖かく迎えてくれたのは、かつて大阪で出会ったレヴィット牧師とその家族でした。成瀬はレヴィット家に寄宿しながら、アンドーヴァー神学校の特別生として学び始めます。家族全員が助け合うその家庭生活に感銘を受けた成瀬は、後の日本女子大学の寮の



成瀬を暖かく迎えてくれたレヴィット家の人々

モデルにした
たといいま
す。

またアン
ドーヴァー
神学校では、
牧師であり
社会学者と
して有名な
タッカー教
授に親身な

教えを受け、大きな影響を受けました。

アンドーヴァー神学校で約一年半学んだ後は、クラーク大学に籍を移し、さらに研究を続けました。病身の妻を日本に残し、経済的にも余裕のなかった成瀬は、学位取得をあきらめ、短い期間に数多くの教育機関や宗教・社会事業施設を精力的に訪問し、視察を重ねました。

またアメリカの人々に日本の文化を伝えるため、各地で講演会を行ない、成瀬の最も尊敬する澤山保羅の伝記 *A Modern Paul in Japan* を出版しました。

約三年間、アメリカ社会の実態を目にした成瀬は、改めて日本における女子の高等教育機関の必要性を痛感し、自身の使命を見出します。女子大学創設という大きな夢を胸に、一八九三年の十二月末、帰国の途につきました。



W. J. タッカー（1839—1926）

女子大学設立運動

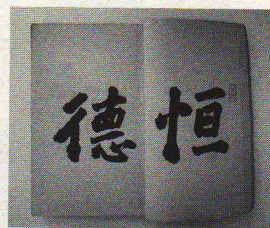
一八九四（明治二七）年、帰国した成瀬は、要請を受け、梅花女学校の校長となります。中等教育機関である梅花女学校を改革し、アメリカであたためた女子高等教育構想を実現化しようとしますが、校内で強い反発を受けます。

そのような中、日本における女子高等教育機関の必要性を唱えた著書『女子教育』を一八九六年に出版しました。これは、新潟時代からの親友 麻生正蔵の協力を得てまとめたもので、女子高等教育の方針を「女子を人として教育すること、婦人として教育すること、国民として教育すること」と主張しました。

女子の半分以上が小学校に通っており、女子に教育は有害無益と考えられていた当時としては、極めて進歩的な考えであったといえます。後に平塚らいてうは、この『女子教育』に大きな感銘を受け、日本女子大学校に入学しています。

成瀬は梅花女学校を辞し、いよいよ本格的な女子高等

教育機関設立の運動を始めます。



『女子教育』
1896（明治29）年 青木嵩山堂
題字「恒徳」は西園寺公望による。

不屈の信念

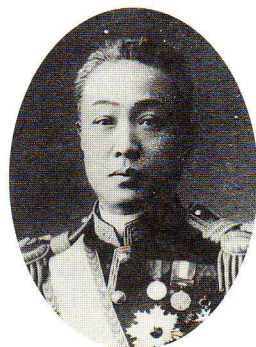
成瀬は著書『女子教育』を携えて、女子大学設立に賛同してくれる有力な協力者を探し始めました。まず大阪府知事で成瀬と同郷の内海忠勝を訪問、その後も次々と人脈を辿り、多くの政治家、財界人、教育家のもとを訪ねました。世間から「山師」^{やまし}などの批判を受けながらも、伊藤博文、西園寺公望、大隈重信、渋沢栄一、板垣退助、



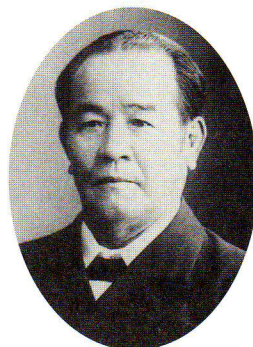
大隈 重信



内海 忠勝



西園寺 公望



渋沢 栄一

山県有朋など当時の日本の政治経済を担う人々を粘り強く説得し、一八九八（明治三一）年、漸く創立事務所の開設にまでこぎつけました。

その後も、経済不況が影響し、運動は一進一退を重ねます。またプライベートでも、病状の悪化した妻を親戚に預ける形で離婚することとなり、悩み深い日々が続きました。開校地を東京・大阪のいずれにするか、東京女

学館との合併案など様々

な問題が起りますが、一九〇〇年、三井家から東京目白の土地が寄付される
ことが決定すると、運動は
開校に向けて一気に進展
しました。

たった一人の貧乏サム
ライの不屈の信念が、日本
で初めての総合的な女子
の高等教育機関を誕生さ
せたのです。

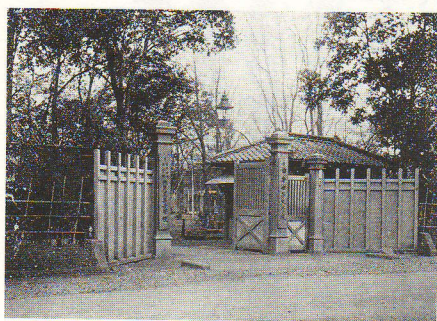
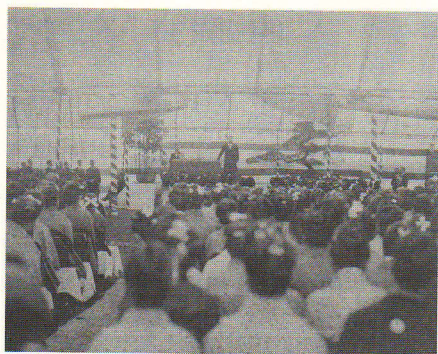


開校を前に建築中の校舎

日本女子大学の創立

一九〇一（明治三四）年四月二十日、五一〇名の新入生を迎えて、女子のための高等教育機関「日本女子大学校」が開校しました。成瀬が四二歳のときでした。

日本女子大学校はキリスト教主義の学校ではなく、開校時は、家政学部、国文学部、英文学部の三つの学部と附属高等女学校が設置されました。学問への意欲に燃える、年齢・職業も様々な女性が全国から集まりました。開校時の教員数は約五十名、その招聘には並々ならぬ苦労があり、成瀬自らが要請にまわりました。設立



上／春雨の中、約 1300 名が列席し、開校式が挙行された。

下／開校当時の正門

の趣旨を充分に理解し、教育方針においても、従来のように教員が一方的に行なう授業ではなく、生徒^{*}自身が考える教育法に賛同する教員が求められたからでした。

そうした成

瀬の熱意が伝わり、帝国大学などから優れた教授陣が集まりました。米・英の外国人教師や、留学帰りの体育教師、フランス料理のシェフや著名な画家、礼法の家元など様々な分野のエキスパートも加わり、成瀬校長と一体となつて授業を行ないました。

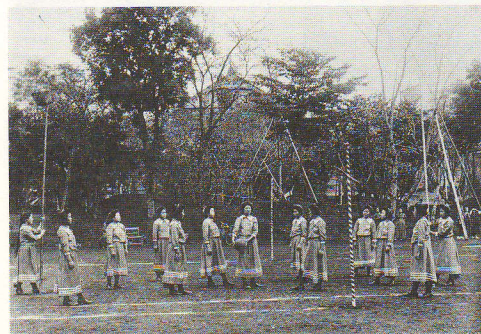
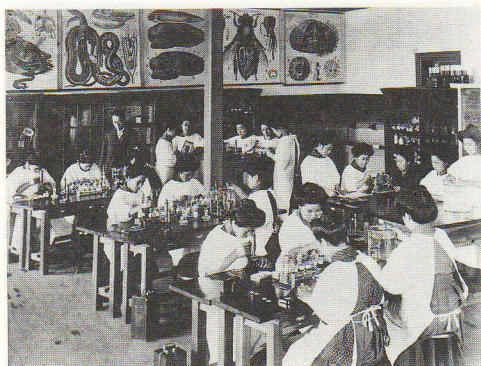


開校当時の教職員。中列右から 5 人目が成瀬。

^{*}「生徒」：旧制日本女子大学の学生

成瀬の教育理念

日本女子大学校では、成瀬校長のもと様々な特色ある教育が展開されました。それまで家事・裁縫などの花嫁修業としか考えられていなかった家政の分野を一学問として確立、理科教育に重点を置き、実験・実習を重視しました。また体育を必修科目とし、バスケットボールや野球、ダンス、自転車など新しいスポーツを取り入れました。秋には大規模な運動会を開催し、「東京名物」とまで言われ、世間の注目を集めました。それは、いわゆる

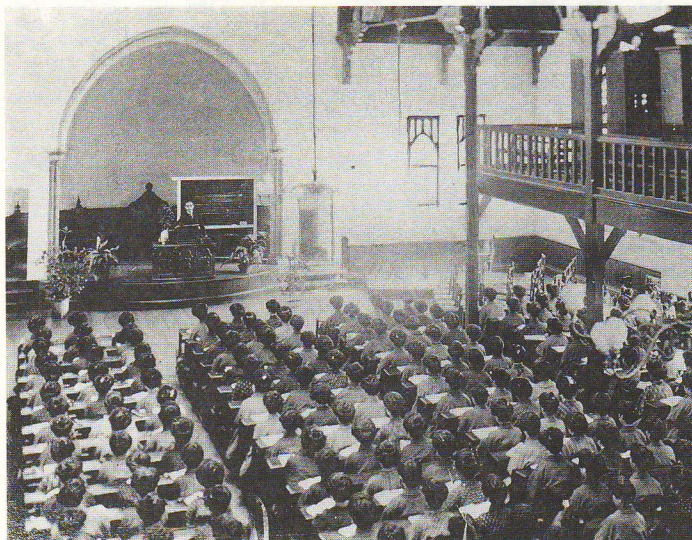


上／顕微鏡を使い実験を行なう生徒
下／成瀬が考案した日本式バスケットボール

良妻賢母を育てる古い女子教育とは一線を画した新しい教育法であったといえます。

さらに、成瀬校長による「実践倫理」の講義が週に一回行なわれ、講堂に集った生徒は、教育・社会・哲学・宗教・時事問題など国内外にわたる幅広いテーマの講話に聞き入りました。

成瀬の理想は大きく、将来は、幼稚園から大学までの一貫教育体制を作り、医学や芸術分野など、多岐にわたる学部を備えた総合大学を完成させることを目指していました。



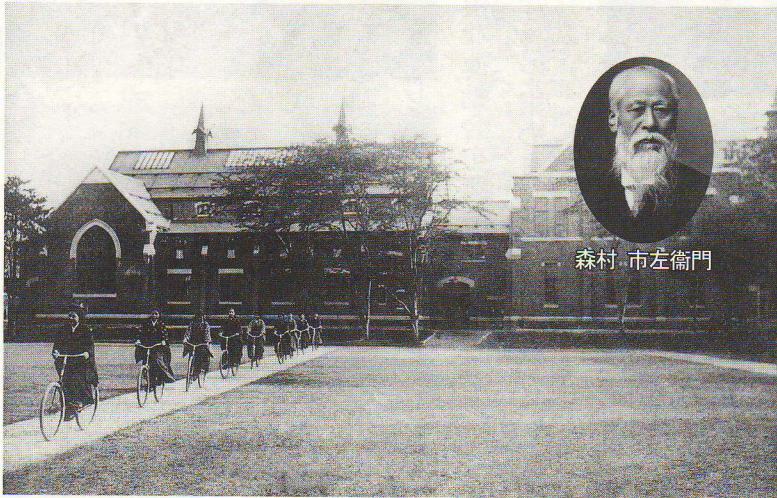
講堂で講義を行なう成瀬。講義はしばしば日の暮れるまで続けられた。

学園の充実 第二のステップ

開校から五年後の一九〇六（明治三九）年、日本女子
 大学校は実業家 森村市左衛門が率いる社会貢献団体「森
 村豊明会」から多額の寄付を受け、教育学部と附属小学
 校・幼稚園を新設

しました。併せて
 校舎と図書館兼
 講堂（成瀬記念講
 堂の前身）も建設
 されました。

また同年夏に
 は、三井家の厚意
 による夏期寮「三
 井家」が軽井沢に
 開寮し、毎年、夏
 期学校が開催さ
 れることになり
 ました。一九〇八



豊明図書館兼講堂（1906年竣工）。右方は教育学部校舎。

年には最新の実
 験設備を備えた
 「香雪化学館」も
 建設され、学園は
 次第に充実して
 いきました。

成瀬は生徒が
 卒業後も生涯に
 わたつて学び続
 け、社会に貢献す
 ることを希望し
 ました。そうした
 成瀬の期待に応
 え、第一回卒業生が同窓会組織「桜楓会」を結成します。

桜楓会は、機関紙の発行の他、託児所・夜間女学校の
 設立、バザーの開催、災害時の救援活動など様々な社会
 活動を行ないました。また成瀬は、広く女性に学ぶ場を
 提供することを訴え、桜楓会を中心に夏期講習会や通信
 教育事業を展開しました。



三泉寮開寮式（1906年）。後列中央が成瀬、その左は三井三郎助。

女子高等教育の普及

さまざまな困難を乗り越え、漸く開校した日本女子大
学校でしたが、女子高等教育に対する世間の風当たりは
相変わらず強いものでした。また日露戦争後の不況のあ
おりを受け、明治末頃の日本では、女子教育界全体の勢
いが衰えていました。そのような中、一九〇六（明治三



「毎月会」メンバーと来校のスタンフォード大学総長と共に（1911年）。前列左から長井長義、成瀬、大隈重信、スタンフォード大学総長ジョルダン博士、洪沢栄一。

九）年、成瀬は女子高等教育問題の研究会「毎月会」を設立しました。

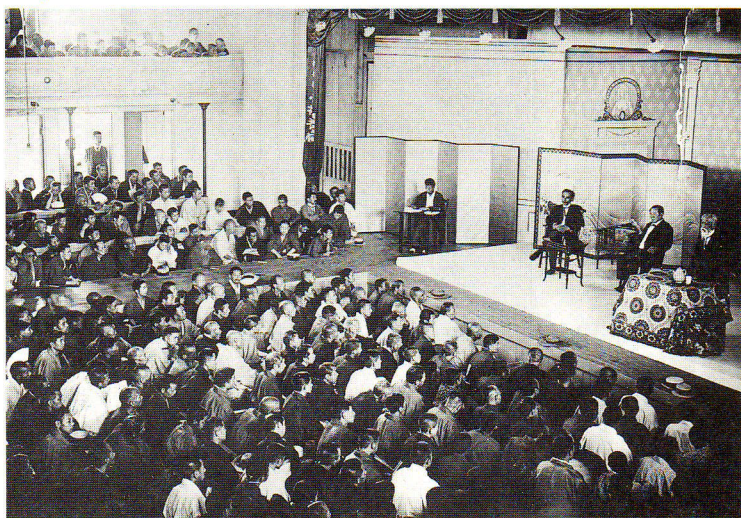
この研究会には、在京の教育関係者や各女学校の校長などが集まり、活発な意見交換を重ねました。

また、成瀬

は女子高等教育への一般の理解を深めるため、洪沢栄一や森村市左衛門、大隈重信ら日本女子大学の評議員と共に、北越地方や関西方面で講演会を開きました。

さらに『進歩と教育』、『新時代の教育』などの著書を刊行し、教育論を展開しました。

国により教育調査会や臨時教育会議が設置されると成瀬はその委員に任命され、教育全般に対しても積極的な発言を行ないました。



北越地方巡回講演（1910年）。壇上、左から成瀬、洪沢栄一、森村市左衛門。

新たな社会活動

成瀬は情熱的な教育活動を行なう一方、新たな社会活動も展開しました。

一九一二（明治四五）年、渋沢栄一、森村市左衛門、姉崎正治、浮田和民らと共に思想団体「きいつきようかい 帰一協会」を結成します。帰一協会は、第一次世界大戦前夜の不穏な状況の中、様々な宗教や思想の調和・交流を目的とし、実

業家、宗教家、教育家、思想家、学者など当代を代表する人々が数多く参加しました。

活動の最も盛んであった大正初め頃には、会員数は



サンフランシスコにて（1912年）。前列中央が成瀬。

一三〇人を超えました。

例会では、宗教、社会、経済、政治、国際など幅広い問題が活発に話し合われました。

また成瀬は、海外の人々にも帰

一協会の趣旨を広めるため、一九一二年から翌年にかけて、アメリカとヨーロッパを訪問しました。各国を精力的にまわり、約一七〇人もの知識人の賛同の署名を集めています。

成瀬は、日記の中で自らの天職を「社会改良者」であると記しています。「帰一協会」の活動は、女子教育にとどまらない成瀬の大きな理想の一端を表しています。



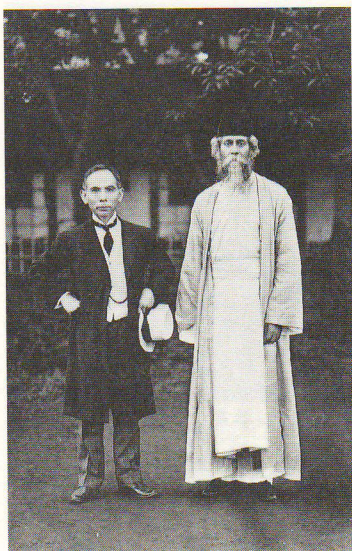
ロサンゼルスへ到着した成瀬（1912年）

深まる思想

帰一協会の活動に窺えるように、晩年の成瀬の思想はキリスト教の枠を超え、さらに広く深化したものに变化していきました。思想家エマソンや詩人メーテルリンク、インドの詩聖タゴールの著作に共感し、生徒にもしばしば語っています。

一九一六（大正五）年、タゴールが来日すると、成瀬はさっそく日本女子大学校での講演を依頼しました。タゴールは講堂で詩を朗読、その後、軽井沢三泉寮も訪れ、生徒たちと瞑想を共にしました。

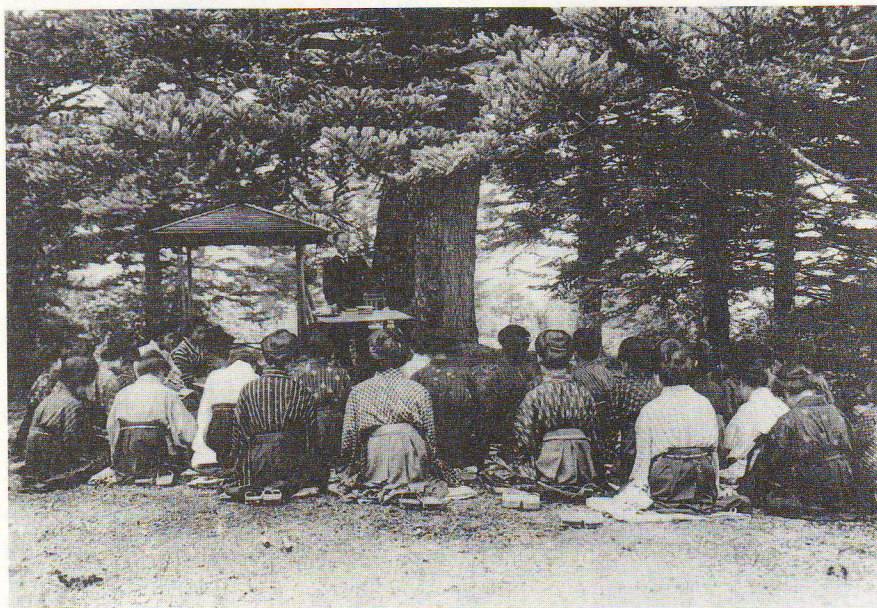
その翌年の夏には、成瀬が「軽井沢山上の生活」と題した十回の連続講義を行なっています。欧米の思想家を



来校したタゴールと共に(1916年)

紹介しつつ、信念の確立、帰一思想、婦人の使命などについて語りました。

その頃、本学には宮沢賢治の妹トシが在学しており、トシは学校で見聞きした成瀬やタゴールの思想を書籍で賢治に伝え、その作品に影響を与えたといわれています。



軽井沢三泉寮「大もみの木」の下で講演を行なう成瀬(1917年)

不治の病と告別講演

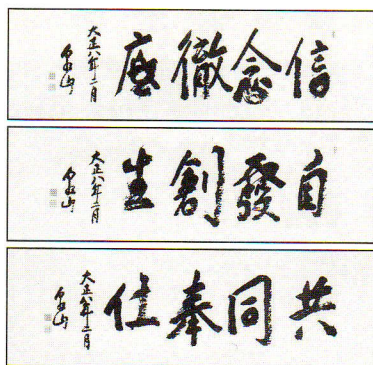
日本女子大学校の創立から十七年が経過した一九一八（大正七）年秋、成瀬は身体の変異に気づきます。医師の診断結果は肝臓癌でした。

重い病状を感じ取っていた成瀬は、入院をこぼみ、最後の仕事を続けました。翌年一月二十九日には講堂において告別講演を行ない、自身の病状と日本女子大学校の将来について語りました。

その後、しばらくは小康状態が続き、多くの見舞客と面会し、求めに応じて死の前日まで揮毫を続けまし



告別講演（1919年1月29日）。成瀬は生徒・卒業生、学園関係者を前に1時間20分にわたる最後の講演を行なった。



三綱領。没する約1ヶ月前に揮毫された。

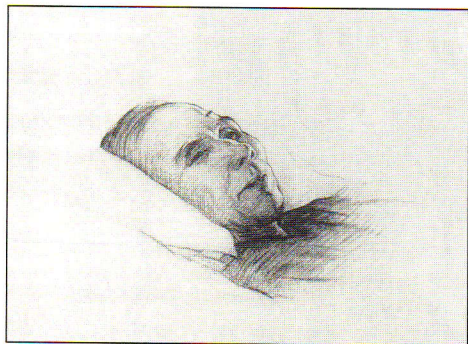
た。本学の教育理念「三綱領」もこの時に遺されました。

また、最後の一瞬まで普段の生活の延長と考え、看病に過度の費用をかけないように諭し、自身の看病を通して、病人看護の研究に役立てるよう指示しま

した。そこには、死に泰然と向き合う成瀬の静かな姿がありました。

一九一九年三月四日午前八時二十分、多くの学校関係者に見守られ、「オオ万事好都合だ、総て満足だ」の言葉を最後に、成瀬は眠るように息を引き取りました。享年六十。

枕元に残された手帳の最後のページには「今後は真に時間・空間を超越す」とありました。



「永眠の成瀬先生」 柳 敬助 画

「永劫に生く」^{とわ い *}

*「告別の歌」の歌詞より

一九一九（大正八）年三月四日、成瀬が没すると、各新聞は一斉にその訃報を大きく伝えました。また教育関係者により追悼講演会が行なわれ、福沢諭吉、新島襄と並ぶ教育家としてその功績が讃えられました。

葬儀は成瀬の遺志により、どの宗教にもよらない「告別式」の形がとられ、日本女子大学の講堂において執



成瀬仁蔵告別式（1919年）

り行なわれました。二千人を越える人々が出席し、大隈重信ら評議員の弔辞の後、成瀬が生前に卒業生に作らせた「告別の歌」が生徒によって合唱されました。夕暮れの中、大勢の人々の涙に見送られ、柩は馬車で雑司が谷の

墓地に運ばれました。

それから三年後の一九

二三年、渋沢栄一ら評議員の寄付によって現在の墓碑が建てられました。また

一九三三（昭和八）年には、十四年もの歳月をかけ高村光太郎が制作した成瀬の胸像が完成し、講堂に設置されました。

子どものいなかった成瀬は、自身の没後、家を断絶する道を選びましたが、日本女子大学、すなわち大勢の教え子たちがその志を継ぐものとして、墓を守り続けてきました。



成瀬仁蔵胸像 高村光太郎作

命日が近づくと、成瀬の墓前には今も、故人の好きだったフリージアが手向けられます。



成瀬が没してから3年後に墓碑が建てられた。
題字 西園寺公望、碑文 渋沢栄一。

成瀬仁蔵 年譜

年	年齢	事項
1858 (安政 5)		旧暦の6月23日、周防国吉敷村（現在の山口県山口市吉敷）に長州藩の下級武士成瀬小右衛門、歌子の長男として生まれる。
1863 (文久 3)	5	この頃、吉敷の郷校憲章館に入学。
1865 (慶應元)	7	祖母、母を失い、やがて継母を迎える。
1874 (明治 7)	16	山口県小郡の医師のもとで翌年まで助手として働く。 弟、続いて父を失う。
1875 (明治 8)	17	山口県教員養成所に入学。
1876 (明治 9)	18	山口県教員養成所を卒業。県内の小学校訓導となる。
1877 (明治 10)	19	夏、澤山保羅によりキリスト教に触れ、出郷。大阪の浪花教会において受洗。
1878 (明治 11)	20	大阪に梅花女学校が開校され、主任教師となる。
1879 (明治 12)	21	服部マスエと結婚。
1881 (明治 14)	23	『婦女子の職務』出版。
1882 (明治 15)	24	梅花女学校を辞し、キリスト教伝道に専念する。
1883 (明治 16)	25	大和郡山の伝道所に赴任。翌年、按手礼を受け、郡山教会の初代牧師となる。
1886 (明治 19)	28	新潟へ赴任。新潟教会初代牧師となる。
1887 (明治 20)	29	新潟女学校を開校、校長に就任。設立に参加した北越学館開校。翌年、牧師を辞任。
1890 (明治 23)	32	新潟女学校を辞し、年末、アメリカに留学。
1891 (明治 24)	33	アンドーヴァー神学校に入学、社会学者タッカーに師事。
1892 (明治 25)	34	9月、クラーク大学に移り、主として女子教育を研究。翌年にかけて各地の女子大学、社会事業施設等を見学。
1893 (明治 26)	35	<i>A Modern Paul in Japan</i> を出版。
1894 (明治 27)	36	1月帰国。3月、梅花女学校校長となる。
1896 (明治 29)	38	『女子教育』出版。梅花女学校を辞し、女子大学設立運動に着手。
1898 (明治 31)	40	病身の妻 マスエを親戚に預ける形で離婚（翌々年、マスエ没）。 大阪および東京に女子大学創立事務所を開設。
1901 (明治 34)	43	日本女子大学校を創設、初代校長となる。
1906 (明治 39)	48	女子高等教育研究会「毎月会」を始める。
1910 (明治 43)	52	英文雑誌 <i>LIFE</i> (後 <i>LIFE AND LIGHT</i>) を発刊。 女子高等教育普及のため、日本女子大学校評議員と共に北越地方で講演を行なう。
1911 (明治 44)	53	日本女子大学校創立10年を記念し、評議員と共に関西地方で講演を行なう。 『進歩と教育』出版。
1912 (明治 45)	54	婦一協会を組織。教育視察および婦一協会の趣旨を広めるため、欧米に出発。
1913 (大正 2)	55	3月帰国。教育調査会会員に任命され、「大学教育改善案」を提出。
1914 (大正 3)	56	『新時代の教育』出版。
1915 (大正 4)	57	勲五等瑞宝章を受ける。
1916 (大正 5)	58	インドの詩聖タゴールを日本女子大学校に迎える。 『新婦人訓』出版。
1917 (大正 6)	59	軽井沢三泉寮において「軽井沢山上の生活」と題して十回講義を行なう。 臨時教育会議委員に任命される。 『世界統御の力』出版。 腸チフスにて赤十字病院に入院。
1918 (大正 7)	60	赤十字病院を退院し、国府津で静養。秋ごろ、腹部に異常を感じる。 『女子教育改善意見』出版。
1919 (大正 8)	60	1月、医師より肝臓癌の診断を受ける。 1月29日、学校関係者を集めて告別講演を行なう。 2月、三綱領「信念徹底」「自発創生」「共同奉仕」を揮毫。 3月4日、永眠。3月9日、講堂にて告別式、雑司ヶ谷墓地に眠る。
1922 (大正 11)		雑司ヶ谷墓地に墓碑が建設される。
1933 (昭和 8)		高村光太郎作「成瀬仁蔵胸像」除幕式。
1934 (昭和 9)		山口市の生誕地に記念碑が建設される（現在、山口市の史跡に指定）。